

HIROSE
広瀬遺跡 3

—広瀬遺跡第3次調査—



調査番号 0419
調査略号 HRS-3

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市西郊の早良平野は、平野を北流して博多湾に注ぐ室見川の流域を中心として旧石器時代から近世までの多くの遺跡が営まれ、豊かな自然と多くの遺跡が残された地域です。

福岡市ではまちづくりの目標としての都市像に、ひとつに自然を生かす快適な生活の都市、ひとつに海と歴史を抱いた文化の都市を掲げその実現にむけ邁進しています。

しかし快適な都市づくりをめざす一方で、これにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によって、やむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっています。

本書は早良区内野地区の道路改良工事に伴い、平成16年度に発掘調査を行なった広瀬遺跡第3次調査の成果を報告するものです。

調査の結果、広瀬遺跡第1次調査で発見された、内野・石釜地区を中心となる中世居館と同時期の、埋立造成跡が検出され、同地域での開拓史をひもとく上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献することができましたならば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にいたるまで多大なご協力を頂いた土木局・地元関係者の方々に対し、心よりの感謝の意を表する次第です。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は、市道荒平古賀線道路改良工事に伴い発掘調査を実施した、福岡市早良区内野8丁目地内に所在する広瀬遺跡第3次調査の調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年度（2004）、福岡市教育委員会が実施した。
3. 調査で検出した各遺構は、土壤（SK）、倒木痕（SX）、柱穴（SP）の様に頭に記号を付して呼んだ。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、加藤良彦による。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、加藤による。
6. 本書に使用した遺構写真は加藤に、全景空中写真は有限会社空中写真企画による。
7. 本書に使用した方位は旧国土座標第2系による座標北ある。磁北はこれに6°30'西偏する。
8. 本書の執筆・編集は、加藤が行った。
9. 本書に収録された遺物・写真・図面などの記録類は、平成18年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 調査区の立地と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 1区の調査	5
3. 2・3区の調査	5
IV. 小結	10

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3 調査区周辺測量図 (1/400)	6
Fig. 4 調査区全体図 (1/150)	7
Fig. 5 遺構全体・土層断面図 (1/100)	8
Fig. 6 出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 7 遺構実測図 (1/50・1/40)	10

写真目次

Ph. 1 調査区遠景 (南から 右は第1次調査区)	5
Ph. 2 2区東壁土層断面 (西から)	7
Ph. 3 2区中世客土中廃石 (東から)	7
Ph. 4 1区遺構検出状況 (西から)	9
Ph. 5 1区全景 (西から)	9
Ph. 6 2区全景 (西から)	9
Ph. 7 3区全景 (西から)	9
Ph. 8 SX01・SX02 (南から)	9
Ph. 9 作業風景 (1区)	9

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本遺跡の本格的調査の開始は、平成15年(2003)年7月22日付で計画が明らかとなった「市道荒平古賀線道路改良工事」の施工を契機とする。受付番号は15-1-32である。埋蔵文化財課と土木局道路建設部西部建設第1課は、この事業計画について遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。当初の事業計画は、総対象面積2,500m²で、平成16年度から着工予定であった。

これを受け埋蔵文化財課では初年度施工予定地の大半に広瀬遺跡が含まれる事を確認、平成15年8月20日初年度施工予定地内に試掘調査を実施した。結果第1次調査1区西側で土壤・柱穴をはじめとする中世の遺構を確認した。

この結果を受け両者の協議により、発掘調査を実施することになった。調査範囲が延べ30m幅3mの道路部分のみで排土は場内処理であるため、調査区を1~3区に3分割し排土を2回反転して調査を実施することとし、平成16年5月6日に着手し、同年6月7日に全ての行程を終了した。

調査番号	0419	遺跡略号	HRS-3
調査地地籍	早良区内野8丁目1716	分布地図番号	早良17(内野)0800
開発面積	2,500m ²	調査実施面積	87m ²
調査期間	040506~040607	事前審査番号	15-1-32

2. 調査の組織

【調査委託】土木局道路建設部西部建設第1課

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

【調査総括】文化財部長 山崎純男 文化財課長 山口譲治 調査第1係長 田中壽夫(当時)

【調査庶務】文化財整備課 後藤泰子

【発掘調査】調査第1係 加藤良彦

【発掘作業】菊地栄子 伊東絹子 脇山千代美 岩見美津代 菅野武

尾崎泰正 川嶋京子 芦馬光夫 岩見征子

【整理作業】木村厚子 国武真理子 白石三佳

II. 調査区の立地と環境

福岡市域は西から、**背振山系**から北流する諸河川流域である糸島・早良・福岡平野、**犬鳴山地**から北西に流れる諸河川流域である柏原平野が主要な部分を占め、これらが博多湾を囲むように広がっている。

広瀬遺跡が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生する西山・飯盛・高祖地墨山地に、東側を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部を背振山地を源流とする室見川が北流し博多湾へと注いでいる。平野の北辺には姪浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、後背には沖積低地が広がっている。また両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位砂礫面が残され、小田部台地にはこの上位の火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。この下流域には西新町遺跡・藤崎遺跡・有田遺跡等、中流域には吉武遺跡群・浦江遺跡・金武城田遺跡・重留遺跡・東入部遺跡群等、弥生から中世を中心とする集落遺跡が展開している。

広瀬遺跡は、これらから南に遠く離れた背振山麓に近く、北東を油山、北西を西山、南を金山に囲まれた盆地状の内野・脇山・石釜地区の、室見川上流域右岸の河岸段丘上に立地する。南北を河川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、調査区は遺跡の北東部に位置し、第1次・2次調査区に隣接する。標高は77mである。遺構は旧耕作土下の、第1次調査区では縄文時代早期～晚期包含層にあたる黄褐色・黒灰色シルトの上面で検出される。

上流域の歴史環境を概観してみると、中・下流域と異なり中心となるのは旧石器・縄文時代・中世で、旧石器時代は峯遺跡でスクレイパー等が、馬立山遺跡でナイフ型石器・尖頭器、脇山A遺跡で細石核・三稜尖頭器、志水A遺跡でナイフ型石器・上広瀬遺跡で三稜尖頭器が出土している。

縄文時代は脇山A遺跡・脇山B遺跡・栗尾B遺跡・当遺跡第1次調査等で早期から晩期に至るまとめた資料が出土している。

弥生時代以降は遺跡は希薄で、谷口遺跡で弥生時代の遺構がわずかに、古墳時代では集落のみならず、1基の古墳も造営されず空白地帯となっている。

古代では峯遺跡で掘立柱建物が検出されている。

集落が形成されるのは12・13世紀の中世以降で、峯遺跡・脇山A遺跡・内野遺跡・上広瀬遺跡で多くの貿易陶器と掘立柱建物群・土壙墓群等を検出している。文献では脇山・横山地区は嘉保3年(1096)背振上宮東門寺領に寄進され、15世紀中頃までは大規模な灌漑施設が造られ飛躍的な開墾がはじまる。15世紀末には博多聖福寺の寺領ともなっており、これらを背景とした開墾を裏付けている。

広瀬遺跡では本調査を含め3次にわたる調査が実施されている。

平成15年度の第1次調査では6,247m²の調査面積で、検出した遺構は、縄文時代早期・晩期の包含層・倒木痕110基・集石炉1基・貯蔵穴3基・土壙39基、古代・中世溝7条・焼土壙44基・土器焼成壙1基・土壙20基・掘立柱建物1棟・倒木痕1基・近世溝1条・土壙4基・水田開墾時の廃石土壙11基・倒木痕1基を検出。中心となるのは縄文時代早期・晩期と13世紀前後の中世である。調査1区では12世紀後半～13世紀初の幅2.5m・一辺約50mと思われる方形区画溝をもつ居館が検出され、内野・石釜地区での中心施設と考えられる。区画内からは同期の土師器焼成壙1基も検出されている。遺物は包含層を中心に、旧石器時代石器、縄文時代早期田村・手向山式期押型文土器・撫糸文土器・石錐・石匙・中期瀬戸内船元系土器・晩期黒川・夜臼式土器・石器を、中世溝を中心に多くの土師

器・貿易陶磁器を検出している。

同年実施の第2次調査では43m²の調査面積で、焼土壙1基・土壙1基を検出している。

参考文献：吉良国光「背振山の所領支配と村落」『九州史学』特集号1987年

『広瀬遺跡1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第865集2005年

『福岡市埋蔵文化財年報』VOL18 2005年

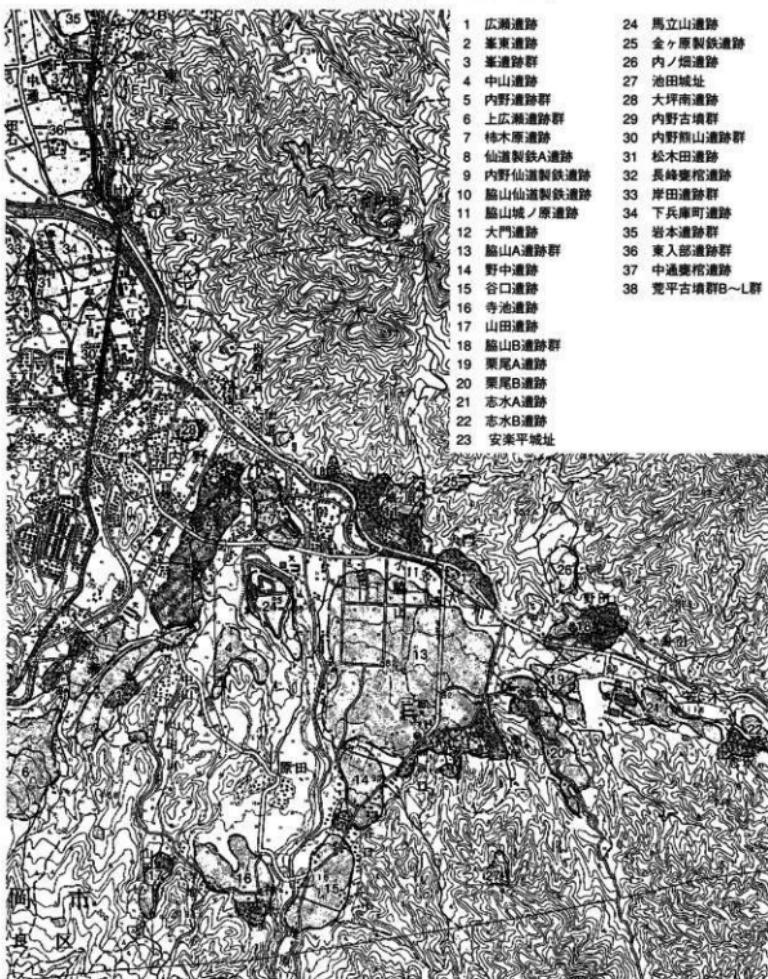


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

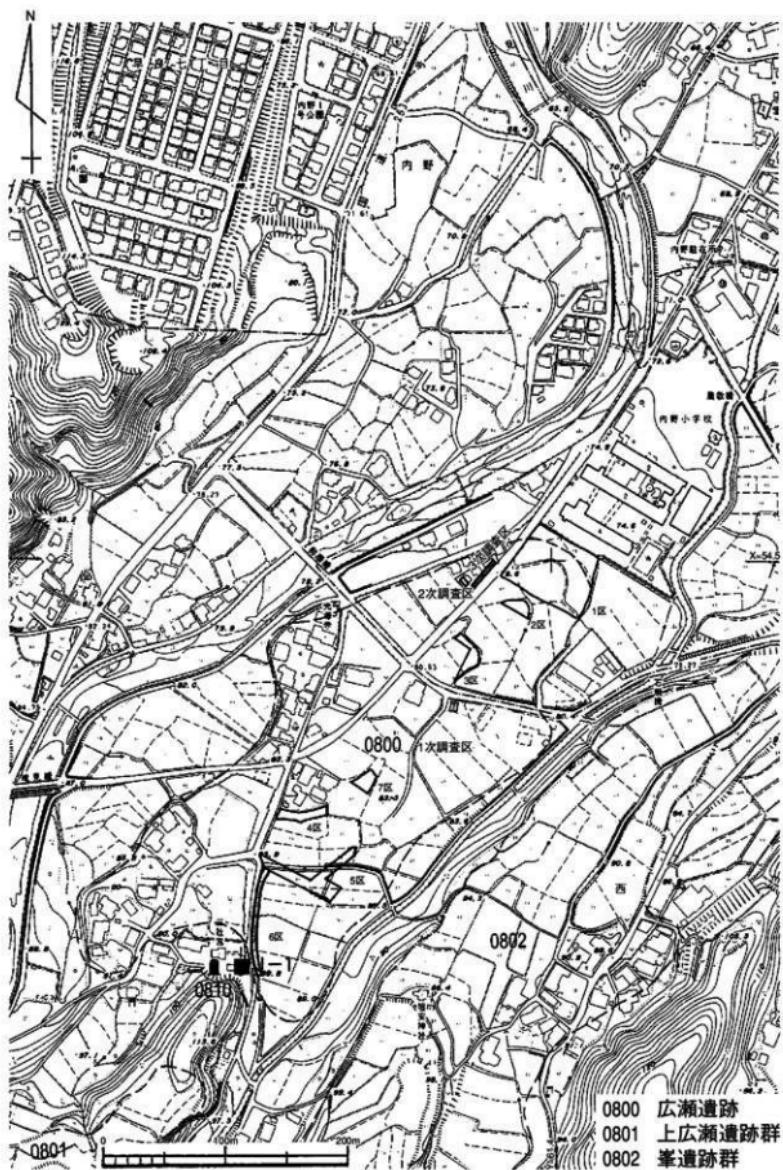


Fig.2 調査区位置図 (1/4,000)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

調査区は福岡市西部に位置する早良平野を貫流する室見川の上流部、東岸の河岸段丘上に立地する。南北を河川に開析され、北東に延びる舌状台地となっており、調査区は遺跡の北東部に位置し、南に第1次調査区、西に第2次調査区が隣接する（Fig.2）。

調査区は道路が拡幅される部分に設定し、耕土の場内処理の必要から、東から1～3区の小区に分割し調査を実施した（Fig.3）。調査面積は87m²である。

基本層序は（Fig.5）GLより70～90cm程の客土（a層）下に20～40cmの現代水田耕作土（b層）、以下東側の1区に40cm程の近世耕作土が残り（1層）、以下に、東側に厚く10～30cmの暗黄灰色の中世の旧耕土が堆積し（2層）、直下の黒灰色シルト（5層）・暗黄褐色シルト（6層）上面を検出面とした。検出面の標高は77.2mである。西側2区では地山が室見川側に傾斜し、廃石・客土がなされ（3層）中世遺構面が造成される。5層は第1次調査区の縄文遺物包含層に対応するが今回は後代の削平が深いため1点も検出されていない。全体的には地形に沿って東に-2%勾配で傾斜する。

検出した遺構は、縄文時代の倒木痕4基、中世土壤1基、柱穴多数・中世整地面・中世耕作層、近世水田耕作層である。

遺物としては縄文時代の黒曜石剥片・中世の土師器片を少量検出したのみである。



Ph.1 調査区遠景（南から 右は第1次調査区）

2. 遺構と遺物

検出した遺構は、前述のとおり東の1区を中心に縄文時代の倒木痕4基、2区を中心に中世整地面、他に中世土壙1基・柱穴多数・中世耕作層、近世水田耕作層を検出した。

遺物は、5層の縄文時代包含層と倒木痕・中世整地層より黒曜石剥片を、中世整地層・耕作層より土師器片を少量検出したのみである。

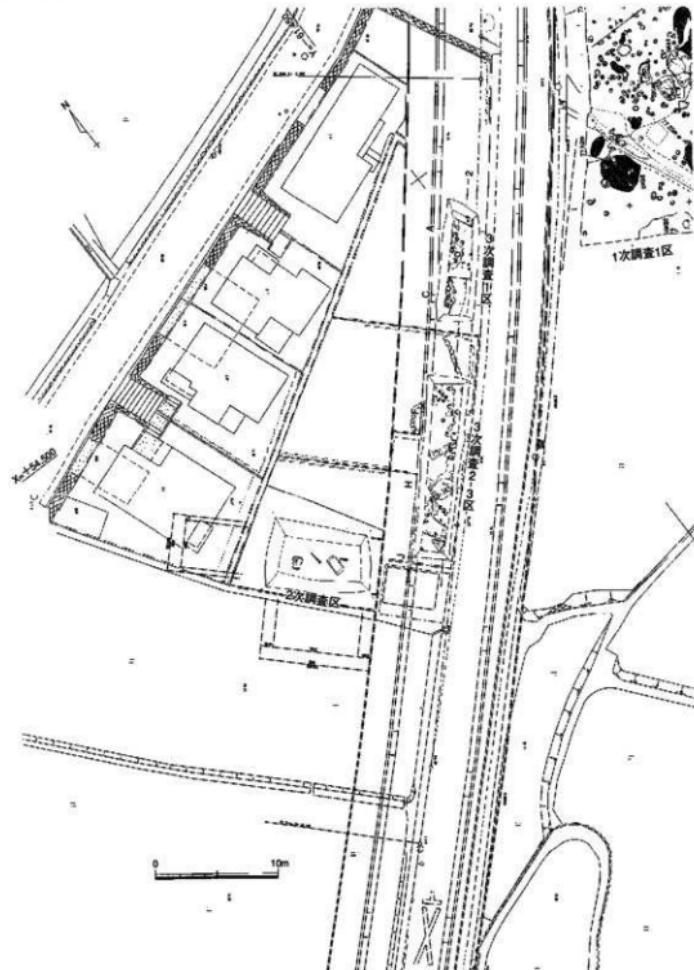
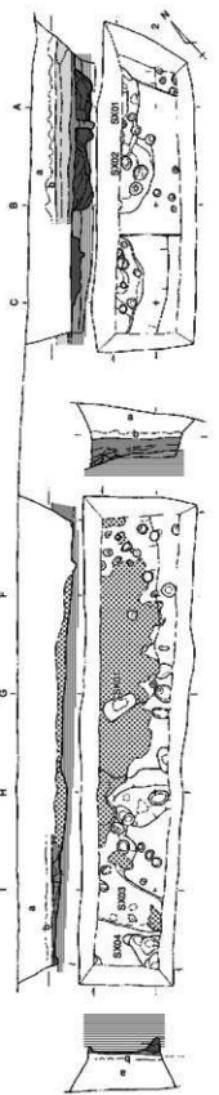


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/400)



1 倒木痕

第1次調査1区で47基検出された森林の痕跡が本調査区まで広がっているもので、1区で3基・3区で1基検出した。

SX01・02 (Fig.7 Ph9) 1区北側で検出され、大半が調査区外に延びる。2基の切り合いでSX02が01を切る。01は $2.25 \times 0.5 + a$ 深さ0.5m、02は $2.15 \times 1.25 + a$ 深さ0.6mを測る。穴の東側から、地山の崩落土が流入する(4-8・16・17層)。上位の覆土の大部分は地山土の堆積と整合する。SX01から縄文後晩期とおもわれる黒曜石剥片が1点出土しており、第1次調査1区の成果とも符合する。



Ph.2 2区東壁土層断面 (西から)



Ph.3 2区中世客土中発石 (東から)

■=近世包含層(1層)
■=中世包含層(2・3層)
■=縄文包含層(4層)
■=発石

Fig.4 調査区全体図 (1/150)

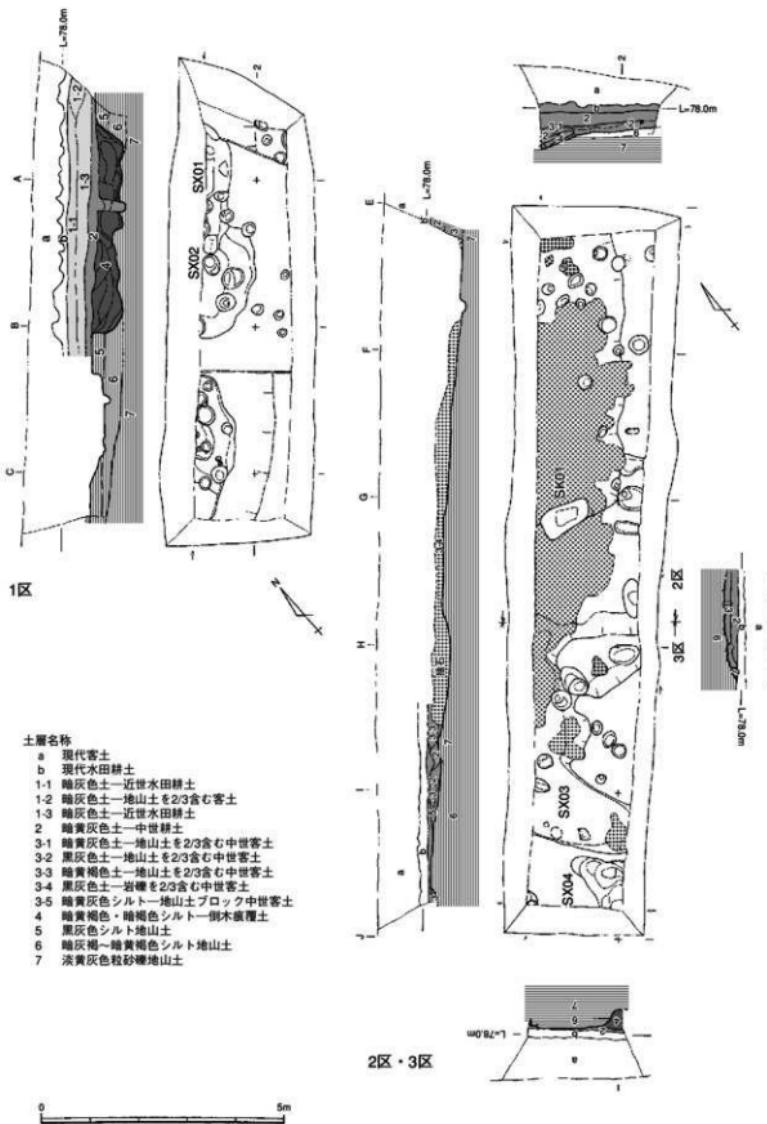


Fig.5 道構全体・土層断面図 (1/100)

SX04 (Fig.7) 3区南端で検出され、同様に大半が調査区外に延びる。 $1.05 + \alpha \times 1.1 + \alpha$ 深さ0.35mを測る。上端・底面とともに不整形で凹凸が著しい。内部から焼石が出土。

2 土壙SK01 (Fig.7) 2・3区中央の中世整地層を切って検出された。 1.06×0.56 深さ0.25mを測る
隅丸長方形の土壙で、覆土は灰褐色砂質土の中世覆土。遺物の検出はない。



Ph.4 1区遺構検出状況（西から）



Ph.5 1区全景（西から）



Ph.6 2区全景（西から）



Ph.7 3区全景（西から）



Ph.8 SX01・SX02（南から）



Ph.9 作業風景（1区）

3 中世耕土・整地層 (Fig.5 Ph3・10) 2区を中心に、室見川に面する北西側傾斜面に多量の捨て石と繩文包含層を含む客土で平坦面を造成し、後に上面20cm程の暗黄灰色砂質土が耕作に用いられた可能性が高い。下面に鉄分・マンガンの沈殿がなく畑作が考えられる。

耕作土出土遺物 (Fig.6) 1は土師器環の底部片で復元底径8.3cm。外底は回転糸切り、内底は回転ナデを施す。色調は灰褐色～黒褐色。13世紀後半～14世紀。

整地層出土遺物 (Fig.6) 2は土師器環の底部片で復元底径10.8cm。外底は回転糸切り後板圧痕が残る。内底は回転ナデ後中央をタテにナデる。色調は淡灰褐色。3は土師器皿の底部片で復元底径7.8cm。外底は回転糸切り、内底は回転ナデを施す。色調は淡灰褐色。ともに12世紀後半～13世紀初で、第1次調査1区の居館と同時期である。

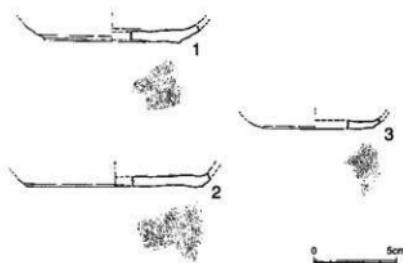


Fig.6 出土遺物実測図 (1/3)

IV. 小 結

本調査区は第1次調査1区と同時の12世紀後半～13世紀初に開墾が開始されており、繩文包含層の大部分を削平し北西側の斜面に客土で整地を行い造構面を造成している。斜面の整地層中下位には開墾の支障となつた岩石を大量に廃棄している。13～14世紀には畠地に転用され、近世にはこの上に水田が開かれ、西の丘陵基部側では中世耕作層の大部分が削平されている。これが近年造成で埋め立てられるまで維続している。

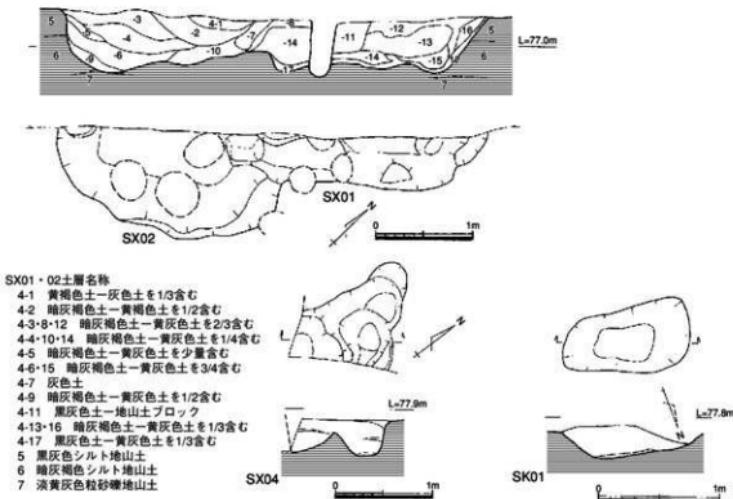


Fig.7 遺構実測図 (1/50・1/40)

報告書抄録

ふりがな	ひろせ							
書名	広瀬遺跡							
副書名	広瀬遺跡第3次調査							
巻次	1							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	902							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2006.03.31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ひろせ 広瀬遺跡	ふくおか し まわら く 福岡市早良区 うちの 内野8丁目1716	40130	0800	33° 29' 34"	130° 20' 31"	20040506～ 20040607	87	道路改良 工事
集落	中世	集落—埋立地業十土壤十柱穴一土師器						

広瀬遺跡 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書第902集

2006年（平成18年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

発行 みやざき印刷
福岡市早良区祖原14-19
(092) 851-5545

